
大学デビュー物語

三沢かも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大学デビュー物語

【Nコード】

N9038D

【作者名】

三沢かも

【あらすじ】

大学生になった僕とペースケは、ほとんどの学生がそうであるように、出会いを求めて数々の新生歓迎コンパに参加していた。その日もいつもと同じように僕とペースケは酒に酔いつつ、女の子を探していた。今日もダメかと思ったその時、ペースケの前にその後のペースケを変える女の子が現れる。

ちてちて

ぴぴぴぴ...

ぴぴぴぴ...

午前7時30分。

いつものように目覚ましに時計に起こされる。

僕はきつと「世界で一番嫌いな音は何ですか？」という質問をされたら、真っ先に「目覚まし時計のアラーム音です。」と答えるだろう。

朝は弱いほうじゃない。むしろ人と比べたら結構強いほうだと思う。けれど一人暮らしの日常の中で朝に強いも弱いもあったものじゃない。単純な問題。朝に弱い人が二度寝している間に歯磨きと顔洗いと簡単な朝食がとれるかとれないかの違いでしかない。

枕元に置いてあるケータイ電話に着信はなかった。

今日も寝ぼけた頭で先週買ったばかりの歯磨き粉で歯を磨く、そろそろ残りの量が少なくなってきた洗顔料は買い替えの時期だった。ハムとチーズ、レタス・キュウリをトーストではさんだサンドウィッチを食べ、駅前のスターバックスで買ってきたブレンドコーヒーをいれる。

上京して2ヶ月、今のところはまだ健康的な朝の定番イベントをこなしている。

ただもつと初めのころはそれなりの生活をしようと頑張っていた。

結局は今のこの形に落ち着いてしまったけれど、これはこれで十分だろう。

高校時代まで食べられなかった朝食をとれているだけでもすごい成長だと思う。

Yellow Cardを音量11で流しながら消音モードのテレビをつける。朝のニュースは政治家のスクランダルに騒ぎ、天気予報はあいまいな予想をここ数日繰り返していた。

僕は起きてから出かけるまでたつぷり1時間をかける。

朝のこの1時間は僕にとって大切な意味がある。あわただしい生活の中でリズムを整えてくれる時間は朝のこの時しかない。

ゆつくりとコーヒーを飲み終えたら寝巻き代わりにしているスウェットを着替え、ルーズリーフと筆箱しか入っていないバックを肩にかけて家を出る。

水曜日の授業は9時開始の1限から。家のドアから大学の教室までは25分。8時半に家賃6万3千円の白いアパートを出る。僕の部屋は202号室だった。

最寄りの小さい私鉄の駅までは徒歩7、8分（不動産屋は5分と言っていた）。小さい駅といっても駅前にはちよつとした商店街があつて、スターバックスもコンビニもドラッグストアも揃っている。

僕にとっては十分すぎるほどの商店街だ。

僕は商店街というものが好きだ。

いろいろな人がいろいろな目的を持ってやってくる場所。普段全く別の生活を送っている人が集い、ふれ合う場所。僕は昔から商店街というものに対して特別な価値観を持っている。僕が下宿場所をこの街にしたのもこの文句ない商店街があるからだった。

1年のうちで本当に過ごしやすい日は5月はじめの2週間と10月の終わりの2週間だけだと思う。

それ以外は暑いか寒いかのどっちか。今年はこの短い幸せな2週間にどれだけ晴れの日があるだろうか。そんなことを思いながら電車に揺られる。

耳のイヤホンへMDプレイヤーがNew Found Gloryを流している。

急行の待ち合わせがなかったため10分ほどで大学の最寄り駅に着いた。大学は駅から近く、100メートルほど開店して間もないコンビニを横目に流しながら抜け、国道を歩道橋で渡った先にある。

1限から大学にいる人間は少ない。

1限から大学にいるのは運悪く必修科目がこの時間になった人がよつぽどの物好き、もしくは単なるバカだけだ。僕は8時半始業の高校時代と比較して1限を軽く見ていたバカの一人だった。

初級ドイツ語の授業は少人数制のクラス単位の授業だった。僕の在籍する文学部文学科日本文学専攻クラスは必修授業が少なく少人数制の選択授業が多い。

僕が第一校舎の314教室に入った時にはもうほとんどの学生は到着していた。何箇所かでは既に会話をしている小さなグループが出来ていた。僕はなるべく後ろのほうの席にバックを置き、周りを見渡した。

ペースケの姿は見えなかった。

見渡している間にユツケと目が合い、お互い片手を上げてオハヨウの仕草をする。

ユツケはその仕草のあとまたすぐに3、4人の女の子グループの会話に戻っていった。僕の仲のいいグループも近くにいたが、時間も時間だったので会話には加わらなかった。

ペースケは授業が始まって5分くらいして耳にi-podのイヤホンをしてながら教室に入ってきた。

水曜の授業は1、3、4限。2限の空いている今日は天気もいいので中庭にある噴水前のベンチに座り、生協で買ってきたパンを食べ、早い昼食とすることにした。

「その後は？」僕はペースケに聞いた。

「別に。そのままだよ。」ペースケは視線を噴水に向けたまま静かに言った。

周りには僕らと同じように数組の学生が噴水前のベンチに腰掛け、小さい声で会話している。6ヶ所のベンチにもう空きはなく、男のペアが2つ、女の子のペアが1つ、カップルが1組いた。

僕はポケットとした頭で焼きそばパンをかじりながら、時折『エスプレッソコーヒー』をすすり、斜め右前のカップルを眺めていた。ペースケもやはり同じようにメロンパンをかじりながら『カフェオレ』を時折すすり、カップルの様子を眺めていた。

「ちょっとした贅沢のつもりで俺ら2人ともコーヒー買ってるだろ

？これの積み重ねが給料日前にひびくんだよなあ…。」ペースケがつぶやく。

「いーのいーの。どうせこんなことぐらいでしか贅沢なんてできないんだから。」僕は飲み終えたコーヒーをゴミ箱に投げた。コーヒーはゴミ箱の淵に跳ね返って地面に落ちた。僕が立ち上がったコーヒーをゴミ箱に捨てなおそうとしたときペースケは言った。

「出かけよっか？」

3限の西洋思想史の授業が始まるまでまだ1時間あった。

吉祥寺までは急行で10分と少し。大学からは新宿、渋谷、下北沢も近かったが、僕らは自然と吉祥寺に向かっていた。吉祥寺はそういう町だった。

吉祥寺駅公園口から井の頭公園まではにぎやかな裏通りを通る。平日の午前中なので古着屋などはまだあいていなかったが、アジアンテイストの料理屋や雑貨店などはもうオープンしていて、明るくなりつつある町並みをのぞかせていた。

公園に入ると池が暖かい光に照らされている。いくつかのボートがカップルを乗せて浮かんでいた。

「こんな朝から暇な奴らばかりだよ」とペースケは自分のことなんて考えていない様子で言った。

会話のはずんでいるカップル、ボートをこぐのに必死な彼氏とそれを引き気味に見つめている彼女のカップル、本を読んでいる彼女とその彼女のひざまくらに横になっている彼氏のカップル。いろいろ

なカップルがいる。

カップルといってもその付き合い方はそれぞれ。それぞれの人がそれぞれな人とそれぞれな環境でそれぞれな出会いをしているんだから、付き合いがたなんて本当にそれぞれだろう。

初デートで井の頭公園の池のボートに乗るとそのカップルは別れるという噂話は有名だった。僕はそんなカップルを見て笑いながら言った。

「別れちまえ」

ペースケも少し間をおいて言った。

「別れちまえ」

僕はそんなペースケに、重っ！とつつこんだ。ペースケは、あ？とにらみ返してきた。病んでるね、と僕は返した。

僕とペースケはなにかとカップルを観察するクセがある。

変わった格好をしている30台くらいの女の人や敷物の上で手作りらしいアクセサリーを売り、東南アジア系の男が使用方法もわからないような雑貨を売っていた。

遠くからはアコースティックギターの弾き語りが聞こえる。池の周りに並ぶベンチには若い女の人からおじさんまでいろいろな種類の人や本を読んだりタバコを吸ったりしながら腰掛けている。

老若男女とはよく言ったものだ。

僕もタバコが吸いたくなった。

ジャケットの右ポケットからキャスターマイルドとマッチを取り出す。僕が立ち止まって火をつけている間もペースケは歩き続けた。

きつと今日はもう授業受けられないだろうな。僕はそう思った。

西洋思想史は配布されるプリントを誰かからもらわないといけない、4限の日本語文献精読はあと1回しか欠席できない。心配してももうしょうがない心配をしながら前に行くペースケを眺める。

彼は細い。

華奢な体型をごまかすためにルーズな青いカーゴパンツをはいているにもかかわらず、茶色い薄地のカーディガンを羽織っているから逆にその細さが妙に強調されている。

前髪を分けている茶髪のみドルヘアは入学当初の金髪からは相当落ち着いたといっている。

たぶんお互い人生でこれだけ変化のあった2ヶ月もないだろう。しかし同時に入学当初のあの輝きは2人とも失っていた。

4月、クラスの同じペースケとは気づいたら行動を一緒にするようになっていた。

まだやりたいことの決まっていな僕らは数々の新歓コンパに出かけた。

まだ過ごしやすい陽気の4月中旬。新入生はみんなこれから始まるキャンパスライフに無数の希望を抱き、その希望へ足を踏み掛ける

下調べをしていた。お互い新しい環境の中で少しでも多くの知り合いを求めている。

ペースケがシャオという女の子に会ったのはそんな時期のちょっとした偶然からだった。

本名はシャオではないけれど、誰もが彼女のことをそう呼んでいた。その新歓コンパも足掛け用の新歓コンパのひとつだった。僕らははじめもっと大規模なサッカーサークルの新歓コンパに行くつもりだった。しかし集合場所には行ったものの、前券が要ると言われ急遽やむなく参加したのがその新歓コンパだった。

「初心者歓迎・アットホームな雰囲気」とチラシに謳っていた中規模のテニスサークル。

飲み会の間、僕とペースケはあえて遠い席に座ることにしていた。お互い新しい知り合いを求めているからだった。

新宿コマ劇場前の居酒屋はほかのサークルの新歓コンパも行われていたらしくとても騒がしかった。

注文が乱れ飛び、店員はせわしく厨房と座敷の間を動き回っていた。

新入生はみんなまだ慣れない酒に酔い、狂っていた。

僕は僕で狂っていた。男友達を作っていく一方で、女の子との出会いを求めているからだった。

コールがあちこちから飛び交い、ビールやチューハイが湯水のように

に人の胃のなかへ流れ込んでいった。

先輩同輩の入り混じった数人がつぶれていった。

僕はあまり酒に強くない。高校のときも何度かつぶれたことがあった。だからコールが回ってきたときだけグラスに口をつけ、あとはテキトリーな人にコールをまわしていった。

大きな渦潮のように時間が過ぎ去り、宴会も終盤に差し掛かったころ、僕はペースケの姿を探した。

部屋の端のほうには女の先輩と新入生の男が寄り添うように眠っていた。

僕の斜め前には体育座りのまま顔を突っ伏している男の先輩がいる。ある意味壮絶な光景だった。

地獄絵図、という言葉が頭の片隅に現れる。数人は元の席から別の席へ移り、コールを叫び続けている。

ほかの数人は女の子を見つけては寄ってたかって連絡先を聞き漁っていた。

ふらつく足取りで人と人との間を手を踏みつけないように歩くのはなかなか大変だった。

ペースケは下駄箱の先の一番壁側の席にいた。

集団から少しはなれ、女の子と二人でくつついて話していた。

二人とも顔が赤い。もうだいぶ酔っているようだった。

僕は彼に近づいていき視線が合うとにやついてみせた。彼もにやついて返した。

となりの女の子も笑顔で僕を見つめ返した。黒い髪は肩の少し下までかかり、どことなくあるテレビタレントに似た顔をしていた。僕はにやついたままの顔でその場から離れた。

この日ペースケと顔を合わす機会はもうなかった。それが2人の暗黙の了解の合図だった。

僕にとってその日はたいした収穫もなかった。

残り半分以下のビール瓶を2、3本一気し、残り三分の一以下のピツチャーをコールに合わせて飲んだ。同じ学部の友達が何人かできた。女の子の連絡先もいくつか聞いた。

けれど、それだけだった。

おぼつかない足取りのまま今では顔も覚えていない誰かと一緒に新宿駅まで帰った。

吉祥寺で乗り換え、最寄りの駅についた頃には酔いは冷め、なんともいえない虚無の感情と不甲斐感だけが残っていた。

ペースケのことはまったく忘れていた。

雨が降る（前書き）

とある新人生歓迎コンパ。ペースケの前にシャオと呼ばれる女の子が現れた。

雨が降る

ペースケにとってその日はとても運命的な日になった。

ペースケはその日のうち酔った勢いでシャオに告白した。

翌日ペースケからそう聞いた僕は驚いた。まさかそこまで状況が進んでいたとは思わなかった。

シャオがそのときどういふつもりでそう言ったのかはわからない。僕はあきれた顔をしている裏方で少しの焦りを感じていた。

その気になったペースケはシャオと出会った新歓から数日たったあと、もう一度改めてシャオに告白しなおした。

その日は朝から弱い雨が降っていた。夏が来るのを忘れてしまいうくらいつめたい雨粒が厚い灰色の雲からしんと降り続けていた。

ペースケは告白して告白されたというその事実を確認しないわけにはいかなかった。

酔いに任せて出してしまった文句が自分自身を責め、逆に消極的にさせていた。

ペースケに対する彼女の反応はその日の天気のように冷たく、そして重かった。

「酔った勢いで告白したんでしょ。ペースケ君で軽く見えるし……」

シャオにそう言われたペースケはひどく傷ついた。

当時金髪だったペースケは確かに外見からすると軽い男に見えた。けれどその中身は恐ろしく時代遅れで幼かった。

一番身近にいたはずの僕ですらそのことに気づいたのはまだだいぶ後になってからの話だった。
そのシャオの返答を聞いたとき、僕はなにか嫌な予感がした。ペースケは言った。

「まだ4月だよ」

予感どおり、彼とシャオとの間の誤解は日増しに大きくなり、さらにその誤解に時の経過が力を加え、想像がたされ、希望を含み、気づいたときにはあともどりできないところまでふくらんでいた。

破裂寸前だった。

渦巻く4月の新歓シーズンも終わり、周りの新入生たちも落ち着きを見せ始めた。

希望は現実となり、残った希望は数多くの疑問を生み出していった。

その頃の僕はペースケとゆっくり話す機会もなかった。

はじめたデニースのバイトは人手不足で忙しく、放課後の時間と休日の時間のほとんどはシステムティックに設計された全国チェーン店の厨房で冷凍食品を解凍し、野菜をいため、ハンバーグを焼いてすごした。

連休中ですらバイトに明け暮れた。

だから僕の中でペースケとシャオのことはもうすでに過去的一幕となり、忘れ始めてすらいた。そんな5月はあつという間に過ぎた。

6月は生活に余裕ができ、4月にストックした友達と遊びまわった。自分に何かを与えてくれそうな友達とは引き続き関係を維持し、影響をあたえてくれそうにない友達とはほとんどその関係を絶ていった。

4月のわずか1ヶ月で高校時代までの倍以上になったケータイのアドレス帳のなかには顔も覚えてないような名前も多かった。内容のない友人はいらない。

僕は5月中に100近くあった新規登録アドレスの半分以上を削除した。

その男はカンパと呼ばれていた。

僕とは名前も忘れたどっかのサークルの新歓コンパで知り合い、そこで意気投合して以来、校舎内で会ったたびに足を止めて話をする仲になっていた。

彼は不思議な男だった。

一種オーラみたいなものを体全体から感じ取ることが出来た。髪は長くない程度でやや茶色、うねるようなパーマをかけ、黒縁のメガネと裏原系のラフでファッショナブルな格好が妙に似合う男だった。

彼も僕と同じ地方出身者だった。

カンパは僕とは違う人間だった。

初めてあったときからそういうような感覚があった。

カンパと僕の思考回路はあらゆる点において異なっていた。彼の思考回路は僕には想像すら出来なかった。

彼は人の思っていることを読み取るのが非常にうまかった。

時折本当に人の心がわかつているのではないかと思ったほどだった。そのときもカンパはこう言った。

「友達に内容ってあるのかな」

あまりにカンパがさらりと言ったからか、それとも僕自身の声かと一瞬疑ったからかどうかはわからないが、僕はその言葉の恐ろしさを、少したつまで気付くことが出来なかった。彼は続けた。

「内容は求めるより、埋めつけるような気もするよね」

6月の上旬、僕は一人の女の子と付き合うようになった。

ユツケという同じ学科の女の子で、4月下旬のクラスコンパをきっかけにメールをはじめ、授業前後に会うようになり、何度か二人で遊びに行った。

1ヶ月ほどそれを続け、付き合うまでになった。

文学科のクラスコンパの幹事は僕ともう一人でやった。彼は一浪生でほっそりしていて背が高く、いつもオシャレな格好をしていた男だった。

はじめから外見でユツケに目をつけていた僕は、企画と居酒屋の選定・予約、コンパの進行を引き受ける替わりにもう一人の幹事にクラスメイト全員のアドレス整理と連絡役を押し付け、コンパ中ユツケにドレスを聞くシチュエーションを失わないようにした。

もう一人の優しい幹事はそんな僕の行動のウラを十分気付きながらも、ニヤつくだけであえて何も聞いてこなかった。

席を自由に動けるといふ幹事の特権は貴重だった。

みんなに気を配るフリをしつつユツケに何回か話しかけ、アドレスを聞きだした。

彼女を2次会へ誘うこともできた。

クラスコンパのあいだ、ペースケともう一人の幹事はそんな僕をずっとニヤつきながら眺めていた。

お互い様だろ。

僕は目で二人にニヤつき返した。クラスコンパはすべてがうまくいき、その夜ユツケのほうから僕にメールが来た。

僕はユツケとメールをしつつ、もう一人の女の子ともメールを続けていた。

ペースケも当然そんな感じだろうなと思っていた。

本人の口からもそんな内容の話を聞いていたし、僕よりはるかにルックスで上回るペースケならむしろそれが自然に思えた。5月の終わり、前年の蒸し暑さを思い出しつつある頃、唐突にペースケは僕に言った。

「シャオに会ってくる。」

彼女の名前をすでに忘れかけていた僕は驚いた。

あの新歓コンパ以来ペースケはひたすら彼女一人のことを想い続けていたらしい。

ペースケはこの前の告白から2週間ほどたったあと（連休の前頃だともう）ふたたび彼女に連絡をとって会う約束までした。

そのオーケイメールにうかれるペースケを見て、僕はまたあのいやな予感と暗い雨を連想した。

それからペースケとシャオの二人が一緒に大学の構内で歩いている姿を何回か見かけた。

はたからみればそれはもう立派なカップルだった。目撃者も多く、そのことがクラスの話題になることさえあった。ユツケにも

「ペースケ君て髪がこれくらいの女の子と付き合ってるでしょ？」

と聞かれたことがあった。

僕は答えをにがしながらテキストにあいづちをうつことしかできなかった。

僕とユツケもこのころには授業の前に二人で噴水前のベンチで話をするのが当たり前の仲になっていた。

しかし僕の場合は白昼堂々のペースケとは違い、会う時間は1限か2限の授業前に限っていた。

もう一人のメールしていた女の子に見つかるわけにはいかなかったからだった。

僕がメールしていたもう一人の女の子とは選択授業のひとつで知り合った。

顔はユツケの方が僕の好みだったけれど、性格はもう一人のほうが好きだった。メールは2人とも好印象だったし、迷っている自分がいた。

しかし結局ユツケを選んだのは彼女の方が早くうまくいくだろうなという予感があったからだった。僕は楽をして彼女が作りたかった。危険な足掛けはしたくなかった。

ペースケの二度目の告白もやはり失敗した。

それを聞いたペースケは断られた事実には違いないものの、その理由が自分の性格や性質に起因するものではないということに安堵し、彼はまだ望みがあるということを信じた。そして以前にも増して彼女に没頭していった。

その頃僕は何度か（ほんの少しだけれど）シャオと話をしたことがあった。

ペースケとシャオの出会った居酒屋にもいたし、僕とユツケが付き合ってから校舎内でお互いのデートの最中に出くわしたりもしていたからだった。

でも、彼女との会話の中にペースケは出てこなかった。

彼女は意図的にペースケの話題を避けているのかのようにも見えた。ペースケが次の告白に向けてコツコツと戦略を練っている間も、僕とユツケはつきあい続けた。

はじめ顔で選んだ子もだんだんとその性格をつかむことができるようになってきていた。

性格を知っていくその過程は面白かった。

いくつかの発見ごとに喜び、いくつかの発見ごとに失望した。積極的に見えた性格は思いのほか消極的で、自己主張が弱かった。積極

休符

7月の前期テストは1つの区切りだった。

テスト中の約1ヶ月間はほとんど勉強に時間をとられる。そしてその後には長い夏休みが待っている。だったら動くのはその前しかない。ペースケはそう考えた。

原宿で夏物の服の買い物を終え、僕らは表参道沿いのロッセリアに入った。

外の様子がよくわかる窓の横の席に座り、歩いているさまざまな人を眺め続けていた。

「最近ユツケちゃんとはどう?」

ペースケは聞いた。

彼の本当にききたいことがそこにはないことはわかっていた。

僕はその問いには答えないで

「本当にもう一度告白するの?」

と聞いた。

ペースケは外から視線をはずさない。

「テスト中はユツケちゃんどうすんの？」

僕はペースケをにらみつけていた。

「だいたいなんて言うの？そりゃ告るなら今しかないのはわかるけど。」

「思ったことを言うよ。」

ペースケは窓から一度視線を外し、フライドポテトを1本とって僕と一瞬だけ視線を合わせた後もういちど窓の外へ視線を戻した。

新宿駅でぼくらは別れた。

夕方の新宿は高校生と学生が嫌に目に付く。僕と同年代だからだろうか。ラッシュまでにはまだ時間があつたので混み具合はそれほどではなかった。

下り電車に乗るためホームに下りるとき、のぼり電車が到着したらしく、階段は上ってくる人でいっぱいだった。

僕は左にちょうど1列分空いた階段を一步一步下っていった。

電車はそれから2分ほどでホームに滑り込んできた。座ることはできなかったが、つり革は半分以上空いていた。僕はドアのそばに寄かかりながら外の景色を眺めた。

見慣れた景色には特に新しい発見も何もない。それはただの流れていく横に終わりのない単なる壁でしかなかった。

うつうつしい梅雨の季節の間、僕は何度かユツケを僕の部屋に誘った。

そういう日は決まっていつも外の景色には灰色の雨が映っていて、付き合い始めのカップルのテンションとは程遠い様相を示していた。

でもその光景がぼく等の中で普通になっていくうちに、自然とぼくらの心の中にも灰色の雨が降り始めていた。

僕らはお互いの心の中にその灰色の雨を見ることが出来た。その雨の感触を鮮明に感じる事が出来た。しかし口に出すことだけは決してなかった。見てはいけないものだということをわかっていたからだった。

雨の降る間隔も次第に長くなり、確実に夏が近づいていた。

夏に何が待つのだろうか。もしくは逆に、僕が夏に何かを待っているのだろうか。

実際夏が来て、試験が始まっても結局ペースケは動かなかった。

動けなかった。

僕はそのことに少し安堵した。

おそらく次失敗したらその次はない。

大学で初めての試験は想像以上につらく長いものだった。

ユツケはまじめな女の子だったから、試験中は会うことはもちろん、

メールさえもつれなかった。

1度図書館で一緒に勉強をしたこともあったが、お互いに集中できず、そのままの調子でなにか煮え切らないまま、結局1ヶ月を過ごした。

僕はそんな檻の中にいる繁殖期の動物のような状態にある種憤り、またある種辟易すらした。もう一人のメールしていた女の子を思い出しもした。

サイテーだな、と思った。

本気で別れようかとも思った。

単純な自分の頭に腹が立ち、幼さを自覚した。勉強はますます効率の悪いものとなっていた。

試験は長かった。

授業をともに受けていないばかりは、クラスメートや知り合いの人脈をフルに使ってノートやレジメを集めた。

ユツケにもだいぶ協力してもらっていた。

一夜漬け一夜漬けの連続で、コーヒーとタバコが狂ったように減っていた。医者に寿命が半年減りましたといわれても納得するくらい生活は荒れた。

最後の方はもうひどいものだった。出てくる答案ごとにテキトーな文章を書きなぐっていた。

夏休みがやってきた。

大学はなくなり、とたんにめつきり人と出会う機会が減った。僕は実家に帰る気も起きなかったので東京でひと夏を過ごすことにした。僕はデニースでしていたバイトのシフト表をほぼ白紙で出した。

夏休みが来てまずはじめにやらなくてはならないことはユツケと会うことだった。

それはとても情けないことだった。

会いたいのではなく、会わなくてはいけないから会うのだった。一応毎日顔は合わせていたものの、1ヶ月近くデートらしいデートをしていないばかりはなにかよそよそしい空気をお互いに感じ合っていた。

出会って3ヶ月、付き合い始めて2ヶ月が経っていたものの、試験が1ヶ月あいだに入ってしまったおかげで、僕らにはまだお互い知らないことが多過ぎた。

無知は不安と疑念をあおった。

梅雨の残りの蒸し暑さが減っていく一方、本格的な夏の陽気が見え隠れしている時期だった。

その日は申し合わせたように夏本番という日で、照りつける陽の光は僕の心まで焼きつくしてしまいそうだった。

渋谷の駅で待ち合わせた僕らは太陽を避けながら雑踏の中に踏み込んでいった。

僕もユツケもジーンズにTシャツ姿だったが、それでも汗は止まらなかった。原宿で夏物の服を探す予定も10分と持たずに断念した。適当に見つけたコーヒーストップで涼むことにしたばかりは会話も暑さでままならなかった。

言葉が熱さに濁されてしまつ、そんな感じだった。

店の中はぼくらと同じように暑さから逃げてきたカップルであふれていた。がんに効いたエアコンがとても心地よかった。

僕がカフェラテを二つ注文している間ユツケには偶然空いた一番窓側の席をとつておいてもらった。僕が会計を終えカフェラテを二つ席に持っていくと、ユツケは持っていたハンドタオルで額の汗をぬぐっていた。

「カフェラテ二つお待たせいたしました。」

僕はそう微笑みながら言った。

ユツケもありがとうと言って微笑み返した。

それから30分くらい、ぼくらの会話にほとんど意味を成すものはなかった。終わったばかりのテストの出来とか、昨日のテレビの内容とかそんなものだった。

「テストできた？」

僕がそう聞くと

「たぶん。」

「昨日のドラマ面白かった？」

そう聞くと

「うん。」

そんな当たり障りもなければ無感情な返答。

僕はどこかの面接官のように質問を見つけては言葉にだしてユツケにぶつけていった。

ユツケはそんなすべての質問に端的に答えていった。

もともと話の膨らむ要素なんてなかった。

質問の趣旨はバラバラで、つなげてても意味をなさなかった。

僕はもしかしたら単純に沈黙が怖かったのかもしれない。気まずい雰囲気を感じていたのかもしれない。昔のラジオパーソナリティーみたいに抑揚のないリズムでひたすらしゃべり続けた。

内容のない会話がさらに30分くらい続いた。

汗も気づいたら止まっていた。気づいたら僕らはその涼しさの中で心地いい眠気を感じながら話をしていった。

自然な会話だった。

お互いリラックスしながら多少の沈黙なら許せるようになっていた。不思議な感覚だった。少

しの沈黙の後、ユツケは微笑んで言った。

「なんか久しぶりだね。」

僕も微笑みながら答えた。

「お久しぶり。」

喧噪

ペースケはその日も憂鬱だった。

結局夏休みまでにシャオに自分の気持ちを伝えられなかった。

夏休みが始まり、顔を合わせる機会はまったくなくなっていた。

今までのようにキャンパス内で偶然出会うようなことのない今、会う方法はメールか電話で誘う以外になかった。

夏休みはバイトが週3か週4ペースで入っていた。

イタリアンレストランのバイトはようやく研修期間を終え、軌道に乗り始めていた。

いろいろなお客さんとの接客は楽しかった。

バイトに行くたびに何かしらの発見があり、自分が成長していくような感じがしていた。

いままでは企業に入って営業なんて絶対に嫌だと思っていたが、それもまんざら悪くないような気がしてきた。

大学のテストもある程度うまくいった。

論述中心のテストはわりと自分にあっていた。

きつといい成績が返ってくるだろう。

サークルも前期の活動を終えて、参加するメンバーが固定化されてきた。

はじめ50人近くいた登録メンバーも今では20人くらいまでに減っていた。仲のいい友達も男女同じくらい増えてきた。

ただ、肝心のことがうまくいってなかった。

シャオは自分のことを一体どう思っているんだろう。
そのことばかりが気になった。

気にしすぎて眠れないこともあった。

何度も何度も寝返りを打った。

試験中はそんなときには勉強さえしていればよかったが、夏休みに入った今となつては眠ろうにも眠れない、考えようにも答えが出ない。

そんな無限ループの悪循環でしかなかった。

答えを知ろうにも知るすべがない。

その悩み自体が生活の弊害でしかなかった。

しかしそうは思いつつも、悩んでいる現状をある種安堵している自分がいることにも気付いていた。

シャオのことを考えると大概は気が重くなることばかりだったが、幸せな気持ちになれることもしばしばあった。

人の気持ちをあれこれ考えるのは意外に面白かった。

それが仮に自分を傷つけるようなことであつたとしても、想像の中ではそれをいくらでも弁解し、ポジティブに解釈していくことができた。

いつそのこと答えなんて一生わからなくなつていいと思つたこともあつた。

このまま好きな人を好きな人のままでずっと思い続けられたらそれでいい。
そう思った。

しかしやはりそれだけじゃ満足できなかった。

人はその向上心ゆえに絶えず上を向いて歩んでいく。
ペースケもその現状に一定の満足と安堵を持ちつつも結局「彼女と付き合いたい」という気持ちが上がってしまった。

8月の下旬だった。彼は長い葛藤の末、シャオにメールをした。

大学は自分探しの場だという。

じゃあ、今の僕のこの状態は自分を探しているのだろうか？

朝起きて顔を洗い、朝食をとる。

音楽を聴きながら2曲分のタバコを吸う。

アパート前の自動販売機でミネラルウォーターを買い、50ccのスクーターでデニースに向かう。

厨房ではモニターに出ている料理をマニュアルどおりに調理している。
く。

休憩時間にはやっぱりタバコを吸う。

午後10時にバイト先出る。

早上がりでまかないがでないときには家に帰る途中のスーパーで夕

飯の買い出しをする。帰ったらまず電気をつけ、音楽を流す。

そして窓を開ける。風のない日はエアコンのスイッチを入れる。

冷蔵庫から冷やした缶チューハイとグラスを取り出し、氷を4つ入れて注ぐ。

ベランダにでてタバコを右手で吸いながら左手でチューハイを飲む。

僕の住むアパートの前は小さい道路をはさみ、一戸建ての住宅地が並んでいた。視線を部屋の中に戻すと、ベッドの上に原宿の古着屋で買ったリュックとスーパールのレジ袋が無造作に放り出されていた。こんな生活がもう2週間以上続いている。8月ももう下旬に入っていた。

単調な生活。

ループアンドループ。僕は何かを求めている。何かが僕を求めている。

9月のシフト表は8月と一転して学校が始まる20日まで斜線を入れた。

1日目は連勤で疲れたからだを休めるために1日中家の中に引きこもった。

2日目、この日は事務的な作業に追われた。

こういう日もある。

郵便受けの中には大学から成績表が送付されてきていた。

僕は予想通りいくつかの単位を落とした。成績は試験日程と比例して下降していた。

成績表を机の上のファイルにしまっってしまうと部屋の掃除をした。この1ヶ月部屋にいた時間は長くなかったので物は散らばっていなかった。いくつか残っていた洗い物を片付け、約2週間分のごみをビニール袋につめ、収集日を確認しないままアパート前の集積所においた。その足で切れかけているシャンプーや洗顔料、洗剤類を駅前のドラッグストアへ買いに行った。

その帰りにATMで5万円引き落とした。残高はまだまだ3ヶ月くらい働かなくても暮らせるほどあった。

僕は一体どれだけの時間をあの厨房で過ごしたんだろうか、20時間まで数えたところでバカらしくなってやめた。

商店街を抜ける途中美容院を見つけたので髪を切った。

それらの作業を終えらともう5時を回っていた。僕はユツケにメールをして夕食に誘った。返信メールはすぐに返ってきた。

ユツケはそれから1時間ほどやってきた。

会うのは2週間ぶりだった。

僕はユツケを待つ間、エアコンのスイッチをオンにし、ありあわせで軽い夕飯を作っていた。

フランスパンとサラダと既製品のシチュー。

彼女は部屋に入ると腰を下ろし、最近何していたかを楽しそうに話

した。

彼女は既製品のシチューが一番おいしいと言った。

僕はそのシチューが既製品であることは言わないでおいた。

僕はユツケの最近の話に耳を傾けながら、彼女の好きなスクリュードライバーと僕のカシスウーロンで乾杯をした。

ユツケは僕が何をしていたか聞きたがった。

僕はバイトだよ、と答えた。前会ったときも確かそう答えた。

彼女は少し怪訝な顔をしたけど、僕は本当にただバイトだよ、としか答えられなかった。

本当にバイトしかしていなかった。バイトをして、タバコを吸い、夜に少し酒を飲んで寝る。それだけ。そんな僕が少し惨めになった。

ユツケは言った。

「大変だね。」

僕は苦笑いして答えた。

「まっただよ。」

ペースケとも会った。

ペースケも夏休みはバイトに追われていた。彼は実家通いだった。

吉祥寺のちよっとおしゃれなイタリアンレストランでフロアの担当をしている。
その白シャツに黒エプロンというウェイター姿はとてもよく似合っていた。

笑顔で注文をとり、笑顔でスパゲッティを運ぶ。

僕はユツケと二人でそのレストランに1度だけ足を運んだことがある。

ペースケはドリンクを1杯サービスしてくれた。
そういえばそのときもやはり笑顔だった。ペースケが僕にあんな笑顔を見せたのはあの小さなイタリアンレストランでだけだった。

ペースケとは新宿であつた。

町の喧騒はいつもどおりの人の多さに加え、気が狂いそうなほどの暑さのせいで、どこかしら殺気立つものがあつた。

僕らは南口で待ち合わせ、その機嫌の悪い町の中を無感情で歩いた。

甲州街道の横断歩道では何十人という人が信号待ちをしていた。

みんなそれぞれがそれぞれの何かに怒っているように見えた。

コンクリートの地面はフライパンの底を連想させた。

ぼくらの靴のそこから黒い煙が出てきて、ジューッと音を出しながら黒焦げになっていても驚かなかつただろう。

信号が青になると同時に人々は後ろから誰かが追ってきているのかのように歩き出した。

僕らは道を左に折れて高島屋の方へ歩いた。

高島屋のレストラン街にはオーダーを受けずにタダで座って話せるベンチがいくつかある。

コーヒーショップで手ごろな値段の飲み物を買い、時間制限のないベンチで話しをする。ユツケに教えてもらった時間のつなぎ方だった。

今は別に時間をつないでというわけではなかったけど、込み合ったスタバで語り合うような根気もなかったからちょうどよかった。

イスはなかなか空かなかったが、コーヒーを買って5分ほど歩き回ったあと、2人組のおばさんたちが席を立った。僕らが腰掛けたときにはすでにコーヒーは半分になっていた。

「バイト忙しい？」ペースケがまず聞いた。

「8月中は毎日だったよ。」

「…今は？」

「20日まで休みをもらったんだ。帰省するって言って。」

ぼく等の隣を席を探しているさっきのとは違う2人組のおばさんが通り抜けて行った。

「何でまた？」

ペースケはコーヒーのストローを唇に当てながら僕の話聞いていた。

「スランプなんだ。」僕は冗談ぽく笑顔をつくって言ったつもりだった。

けれどペースケは笑わなかった。ストローを唇からはずし、言った。

「停滞だね。」

僕は苦笑いで答えた。

「まっただよ。」

夕立ち

バイト漬けの日々が終わって5日がたった。

そろそろなにかをする頃だなと思った。

別に使う予定はなかったけれど、僕はそれからさらにお金を5万円おろした。

8月の給料がはいるのはまだ1週間以上先だったけれども、それでも7月までの貯金はまだそれなりに残っていた。

8月中は使うことすらできなかったからだ。

僕は朝の9時に暑さで目が覚め、顔を洗った。ひげが伸びていたので剃った。

僕はひげがあまり伸びる体質ではなかったので髭剃りは1週間に一度くらいでよかった。その

おかげでひげそり用クリームは東京に出てきて以来まだ一度も買っていない。

僕は鏡に映った自分の顔を久しぶりにまじまじと眺めた。

そこにはいつもどおりパツとしないルックスの男がうつろな目をしてたたずんでいた。

髪は伸びすぎていて薄茶色の毛先と根元の黒色が混ざったよくわからない色をしていた。

ももとの髪の色が茶色がかっているのですこまでの違和感はないが、その姿はどうしても滑稽に見えた。毛先はクセでカールしてい

た。顔は夏のこの時期にしては白く、去年に比べるとほほの肉が落ちていた。Ｔシャツにプリントしてある英語の意味は鏡文字であることを差し引いてもわからなかった。

ひげを剃ってしまうとベランダにでてタバコを２本吸った。

灰皿代わりの空き缶はすでに吸殻でいっぱいだった。

この前吸殻を捨てたのはいつだったろう？

それほど遠い昔ではないはずだった。

太陽は相変わらず絶好調で、もうこれでもかというくらい輝いていた。

今日も皮肉なくらい暑かった。

立っているだけで背中から汗が噴き出してきた。たまらず部屋に入り、クーラーのスイッチをいれた。それからいつもどおりパンを焼き、サラダを作った。

トマトはいつもの倍使った。

トーストをかじりながらニュースを見た。島根県で女子高生が一人殺されていた。聞いたこともない市の市長が贈賄容疑で逮捕されていた。

みんな僕みたいな生活をしていれば犯罪なんて起きないんだけどな。

そう思った。

でもどうやら世間は僕のような単調なリズムでは動いていないらしい。

僕はそろそろ20歳になろうとしていた。こんなんでも20歳になつていいのだろうか。それとも20歳にふさわしい人間にならなくちゃいけないのだろうか。

10代でいられる日があと何日か数えてみた。ちょうど20日間だった。

あと20日間でやり残した20歳になるための準備をするのはどう考えても不可能なことだった。

僕はベッドに横になり、蛍光灯と見合いながら、いままでの自分の人生をひとつひとつ節目ごとに思い返していった。

それらはあまりに単調なもののようにも思えたし、またある意味すごく激動的なもののようにも思えた。

もし僕が今死んでしまったら果たして僕は僕の今までの人生を後悔するのだろうか？

きつと後悔するに違いない。

けれど心のどこかでもうすでに人生を満足してしまっている自分がいるようでたまらない。

そんな自分がとても恐ろしかった。そしてこれからそんなに自分が変わるかと思うと不安で仕方がなかった。

耐え切れなくなった僕は部屋の外に飛び出した。

駅まで歩き、電車に乗った。大学の最寄り駅を通り過ぎ、終点の渋谷で降りた。

ケータイもかばんも持ってなかった。

僕が身につけていたのは財布だけだった。

センター街を横切り、細い路地を登り代々木公園まで歩いた。そのまま公園を突っ切り、原宿駅までいった。歩調は速く、一定だった。

原宿駅についた頃には汗は背中をつたい、トランクスはビショビショにぬれていた。

額に汗をにじませ、汗で変色したＴシャツ姿の僕は原宿の町で嫌に目立った。

太陽は南中をやや過ぎたところで、影はまだ短かった。

のどは渴いていたけれど不思議と疲れはなかった。このままどこへでも歩いていけそうだった。

実際僕はそのまま新宿まで歩き続けた。

新宿についた頃にはさすがに足も疲れ、もう歩く気は起きなかった。電車に乗り、吉祥寺で乗り換えた。

そのときはもう早く着替えてシャワーを浴びたいという思いしかなかった。

そして疲れの具合と反比例して、それまで体に染み付いていた無意味で空虚な感情もどこかへ消えてしまっていた。

汗と一緒に流れ出てしまったようにも思えた。

僕が最寄りの駅に着いたと同時に激しい夕立が降り出した。

もともと汗でびしょびしょだったので僕は雨を気にせずゆっくりとしたペースでアパートに戻った。

そのせいで部屋についた頃にはずぶ濡れで、身につけていたもの何から何まで乾かさなくてはならなかった。

自分で腹をくくつといてなんだけれど、財布の中の1万円札とキャッシュカードまでがぬれてしまっていたのには少しあせった。

幸い両方とも使えなくなることはなかったけれど、そうなることを気にも留めないで雨に打たれていた自分の心境は、後から考えると少し信じがたいものだった。

ぬれた服を洗濯機に放りこみ、シャワーを浴びて財布の中身を乾かし終えた頃には夕立も去り、もとの蒸し暑い気温が戻ってきた。

僕はベランダでタバコを吸った。久しぶりにタバコがうまいと感じた。

風はまったくなかった。タバコの煙はまっすぐ上に奇妙な模様をえがきながらのぼり、消えていった。

ユツケに電話したいと思った。

こちらから連絡するのは久しぶりだった。

3日前から毎日メールは着ていたものの、すべて彼女からだった。

「もしもし」

「今何してたの？」

「TOEICの勉強を少し…一応申し込んだじゃったし…」

「それはそれは」

「どうかしたの？」

「電話するのは久しぶりだよな」

「そうだね。でも会ったばかりだよ」

「明日会える？」

「…明日はお母さんとデパートに買い物に行くの」

「あさつては？」

「あさつては大丈夫…たぶん」

「会お」

そうして僕の夏休みは過ぎていった。

セミと梅雨

ペースケは9月のはじめにシャオと会った。

吉祥寺で待ち合わせをしてデパートを回って買い物をし、僕が薦めたケーキ屋で紅茶とチーズケーキを食べた。

その後、井の頭公園で日陰に入っていたベンチに腰掛け、長い時間話をした。

何もかもが幸せだった。

まだ付き合っていないとはいえ、これ以上望むべきものはないように感じられた。

だから告白をどうこうと考えている場合ではなかった。

話のなかでついうっかり好きだと言ってしまいたい衝動に駆られたことが何度もあったが、ペースケはその衝動のたびに自分を必死に抑えた。

「今」を壊したくなかった。

こころのどこからその一言を言ってしまったら何もかが終わってしまうような、そんな予感が見え隠れしていた。

だからペースケはひたすら別の話題を話し続けた。早送り再生のお笑い番組のように話し続けた。沈黙を恐れ、シャオを笑わそう笑わそうと必死だった。

日が暮れて別れ、吉祥寺から電車に乗って家に帰ってきた頃にはとても疲労していた。ただそれと同時にものすごい充実感と幸福な感情を実感することができた。

新学期が始まり、僕は1ヵ月半ぶりにシャープペンシルを握った。しかし教室のイスに座り、ルーゼリーフを広げても、今自分は勉強しようとしている、という状況がなかなか理解できなかった。

先生の声はひたすら遠く、自分の書く字は他人の書いた字のように思えた。その日2つ目の授業の半ば、僕はシャープペンをノート脇に置き、机に突っ伏した。

ペースケも似たようなものだった。昼休みに学食でうどんを食べながら僕にささやいた。

「オレなんで文学部はいったんだろう」

こっちが聞きたかった。

再びバイトの日々が始まった。

休んでいたのはたった20日間だけだったけど、なにか自分がデニーズで働いていたのがとても遠い昔のような気がした。

こころなしか社員の反応が冷たかったけれど気にしないことにした。僕とほとんど同時に入った女の子が喜んでくれたのがうれしかった。厨房で僕が入ったときから世話になっている先輩は

「どこで女の子と遊んでたんだよ」

とはやし立てた。

僕はケチャップライスをいためながら

「ハハハ、先輩こそ20日間で何人の女の子とあそんだんですか？」

と言った。

彼は3人と答えた。

その日はラストまでシフトを入れていた。

2時に店が閉まり、1時間ほど仕込みをする。厨房に残っていたのは僕ともう一人社員のコック、そしてフロアに残っていたのは店長と20中盤のフリーターの人と僕とほとんど同期の女の子だった。

家の方向が同じだったので僕はその女の子を家まで送っていった。

彼女も一人暮らしで、僕とは違う大学に通っている。歳と学年は僕と一緒にだった。こうやって家まで送るのはいままでも何度かあった。

その帰り道僕らはいろいろな話をした。

彼女は自転車を引きながらだったが、僕はスクーターを引きながらだったので歩くスピードは遅かった。

彼女の実家は群馬の桐生で両親は2人とも高校の教師をしているらしい。

彼女も文学部で英米文学を専攻していた。将来は英語の教師になることを目指している。黒いセミロングの髪をいつも後ろで結い、白いなじを見せていた。

顔は端整で教師っぽいといわれればそんな気がした。教壇に立ってチョークを握り、では次の問題を田中君、と言っている姿を簡単に想像することができた。根拠は何もないけれど、いい教師になるだ

ろくな、と思った。

「ホントはなにしてたの？」

深夜の交差点で車の通らない道で信号待ちをしているとき、彼女が急にそれまでの話題から切り替えて尋ねた。

「…そんな嘘つきっぽく見えるかなあ」

「で？」

歩行者信号が青になり、僕は歩き出した。

「別にどこかへ行ってたわけじゃないんだ。ただバイトをしないで家にいただけ。彼女と遊んだり、友達に会ったり、一人で料理をしたり、買い物したり、散歩したり。あるいはまったく何もなかったり」

道を左に折れる。

「なんかもう戻ってこないんじゃないかと思った」

彼女は無感情に言った。その言葉をどういってもりで彼女が言ったのかわからなかった。本当に心配してくれているのかもしれない。たし、ただ無感覚にそう思い、口に出したただけの言葉のように聞こえた。

「自分でも本当に戻らないような気がしたけどね」

僕は笑いながら言った。でも彼女は笑ってくれなかった。最近の僕はいつもこんな感じだ。

「どうして？」

彼女は僕の目を見据えてそう言った。彼女の目はとても不思議な色をしていた。こんなに近くで彼女の瞳を見たことは今までなかった。フロアでお客に語りかけるときのその目と今僕の目の前にあるその目の光り方はまったく違うものだった。そしてそれはとても奇妙な印象を与える瞳だった。

「どうしてだろ…でもどうしてもあの20日間はオレにとって必要だったんだ。いろんなことを整理する時間ていうのかな…」

「象徴的な調整行動」

「えっ？」

「人は象徴的な行動を起こすことで自らを認識し、安堵する」

彼女はもう一人の誰かに語りかけるように言った。

「だれの言葉？」

「私がつくった言葉。一見変態じみた行動でも、そのひとにとっては象徴的な行動ってこと」

「変態じみた行動かあ」

僕は茶化してやろうかとも思ったが、彼女の顔は真剣だった。深く何かを考えているようだった。ぼくは少しのあいだ彼女の言った意味について考えてみた。しかし答えの見つからないまま、もうひとつ道を入り彼女の暮らしているレオパレス21についた。

そのときぼくらの前に1匹のセミが落ちてきた。もう弱っていて先が短いらしい。セミは何とか再び飛び上がり、闇に消えていったがその飛び方は危うかった。テンは言った。

「この時期に生まれてきたセミは幸せだね」

「えっ？」

「だって7年越しに夢見てたたった1週間だけ見れる地上の世界なんだよ？それがもしあたたかい梅雨の中休みなんか間違えて出てきちゃって、おまけにずっと雨なんかだったらそのセミにとってこの世界は薄暗い雨の世界でしかなかったってことでしょ？そんなの悲しすぎるじゃん」

テンはホントに悲しそうな目をしていた。

「おやすみなさい。ありがとう、送ってくれて」

彼女は明るい声で言った。

「いえいえ」

僕はヘルメットをかぶりながら言った。

「象徴的な調整行動かあ。確かにそうかもしれないね。」

僕は言った。彼女は階段のステップに右足をかけながら振り返り、またね、と言ってまた階段を上り、一番上についたところでもう一度振り返って手を振った。

僕も手を振り返し、彼女の姿を見送るとゆっくりとスクーターを進ませた。頭の中には彼女の言葉が残っていた。

象徴的な調整行動。

そして梅雨に生まれたセミの話。人は象徴的な行動を起こすことで自らを認識し、安堵する。

セミは梅雨に生まれ、テンは悲しむ。

ユツケとテン

ペースケは9月にシャオとあつてから定期的にメールをし続けた。

メールの一通一通に喜怒哀楽し、メールが帰ってこないことがあつたら世界の終わりのような顔をして授業に遅れてきた。

それでもペースケの生活は充実しているように見えた。

サークルに週2で参加し、バイトは週3か週4。

シャオとのメールはうまくいけば4日くらい続くことがあつた（とはいふもののシャオはメールを返すのがいつも遅かつたのでメールの数的にはそこまで多くなかつた）。

本人もその生活に満足しているように見えた。

彼は不思議とそんな忙しい生活をしながらも勉強に集中することができた。返ってきた成績も平均以上だった。思いのほか伸びなかつたが、周りを見渡すとその内容には十分満足できた。成績の取り方はわかつた。後期はもつといい成績がとれる。そう思った。

授業が始まる前日、ペースケはサークルの一人の女の子に告白された。

彼は今ほかに好きな人がいるから、とその告白を断つた。女の子はそれきりサークルには顔を見せなくなつてしまった。

ペースケはそのことでほかの同期から攻められることもあつたけれど、ペースケ自身にはどうすることもできなかった。

女の子がやめてしまったことについては申し訳ないと思ったものの、勝手に告白しといて人を悪者にし、やめていつてしまうのはただいい迷惑だとは思えなかった。

けれどその告白のおかげでペースケは自分に自信を持った。

…持ってしまった。

後期授業が始まって一週間は勉強に対して全くといっていいほど関心が持てなかった。

10月に入った2週間目には出席を取らない授業にはまったく顔を出さなくなった。そうやってどんどん生活の拠点が大学からバイト先へと移行していった。

サークルに入っていない僕はただでさえ友達が少ない。

授業をサボり続けているおかげで、学科内の友達と会う機会もめっきり減った。ただ、その代わりバイトの仲間とはとても仲良くなった。

厨房の先輩とは週一のペースで飲みに行く仲になっていた。

同期の哲学的な女の子とも話す機会が増えた。2人で遊びに行ったことも何度があった。僕らは会うたびに抽象的な人間概念の話をした（彼女は抽象的だとか人間概念という言葉が好きだった）。

ユツケのこと考えると後ろめたい気持ちもあったけれど、彼女と話すのはとても楽しかった。

それはどうしても事実だった。

事実は事実でしかなかった。

ユツケと彼女を比べてしまっている自分がいた。

ユツケはとても頭の切れる女の子だったけれど、自分の意思や思想というものを持っていなかった。ユツケは他人（もしくは社会全体）と自分とを見比べ、一般的に良いとされる道を選ばずに選択していた。彼女にはそのように無難な道を選択するということにかけては天才的な能力があった。決して危険なステップには足をかけない。僕はユツケが人生の中で本当に彼女自身が選んだという選択はおそらくないのではないかと思った。ユツケにはとても大きい可能性がある。彼女は自分のその可能性を理解したうえで、その可能性を限定してしまうことに、もしくは彼女自身をたった1点のみに集中させてしまふことに恐怖を感じていたのかもしれない。

彼女はサークルもバイトもしていない。ユツケは大学でその彼女自身が自らの周りに（自然と）堅固に作り上げてしまった殻を破る機会を探していたのではないかと思う。

少なくとも僕にはそう感じられた。彼女は彼女なりにつらかったんではないか。僕はそんなユツケの殻を破るきっかけの力になりたかった。

でも僕にはその力が絶対的に足らなかった。

優しい友達はおくらのことを

「同棲2年目のサラリーマンとOLカップルみたいだね」

と言った。

もっともつと優しい友達はおくらのことを

「冷めてるよね、倦怠期？」

と茶化した。

一方で哲学好きな女の子はその内面にとっても魅力のあるものを持っていた。

それは色で言うともさにオーロラ色だった。

彼女には才能があった。

ただ彼女自身はおそらくその自分の才能を自覚していなかった。
彼女は僕に

「不完全な分子がなにもない純粹な完璧って何だと思う」

と聞いたことがあった。

おそらくそれが彼女の目指していたものなんだろう。

ただ、僕にとって彼女がそんなものを手に入れてしまったらとてもつまらない存在にかなり得なかっただろう。

それでも彼女は構築していた自己をまた一度破壊し、再構築することによってより完璧な自己というものを求め続けていた。

彼女はいろいろなことをがむしゃらにこなしていく中で（勉強、サークル、バイト…）確実により深い自己人格というものを構築していった。

僕はそんな彼女から多くを学んだ。

僕にとって彼女はある意味僕自身の投射体、つまりある限定分野において是指標だった。

しかし彼女はやはりその自己を構築していく彼女の行為自体に疑問を持ってもいた。

彼女はあるとき僕に言った、私がしていることはただ人格の書き直しに過ぎないのかもね、と。

僕はそのとき、その言葉の意味がわからなかった。

彼女はそんな哲学的な話をするとき、いつもまず少しだけ沈黙し、その沈黙のあとに気難しい顔で象徴的な言葉をさらりと重ねた。ぼくはその少しの沈黙のとき、次はいつたいどんな言葉が彼女の口から出てくるのか楽しみだった。

「もし今私がものを考えなくなったら」

その日も彼女はしばしの間沈黙の後言った。

「あるいはそのほうがいいのかもしれない。…今はまだ私自身が残

「っているっ

風邪をひいてわかること

いつものことだけれど突然厨房の先輩からメールが来た。

「今から飲むよ」

僕は行き詰っていたドイツ語の宿題を放り出し、ジャケットをはおった。

すでにドイツ語の授業にはついていけなくなっていた。出席だけはしているという状態だった。

僕の最寄の駅前にある居酒屋につくと先輩はもうすでに席に座り、生中を一本飲み干していた。僕がつくなり先輩はやあのあいさつもなしに店員を呼びとめ、生中2つと言った。

「何かあつたんですか？」

「あいかわらずヒマなんだな」

「おかげさまで……」

居酒屋は会社帰りのサラリーマンや大学生でまあまあ繁盛している

ように見えた。

「デニーズの前は居酒屋でバイトしていたんだ」

先輩は生中を運んできた女の子の店員が去ると同時にそういった。

「何でやめたんですか？」

僕はビールを一口含んで聞いた。

「別に…なんだろう、ただなんかおもしろくなかったんだよね」

「今はおもしろいんですか？」

先輩はそれには答えず、一気に2本目のビールを飲み干した。

僕のビールはまだ3分の1も減っていなかった。ビールは冷たいうちがうまいんだよ？先輩が言った。僕は飛ばしてますね、と言った。

「仲いいらしいじゃん？」

テンのことを言っているんだなとわかった。

「あのコ」といって楽しいんですね」

僕はビールを残り3分の1まで減らした。先輩は3本目のビールを注文し

「お前もやるねー」

とにやけて言った。

「違いますって、そんなじゃないですよ。好きなのは彼女ですよ、やっぱ」

「好きなのは彼女で、楽しいのはテンちゃんか。…まあ、そんなもんかな」

そんなもんです、とぼくは答えた。

そんなもんです。

「でもオレはお前が、お前の彼女から何かをどんどん吸い取ってるような、そんな気がするんだよな」

「どういう意味ですか？」

「意味も何も、ただそんな気がするだけだよ。お前は普通に彼女と付き合ってるのかもしれない

いけれど、むこうはそうは思っていないのかもしれないんじゃないかって、ふとそう思ったんだよ」

それから先輩は今付き合っている彼女の愚痴を言いながら3本のビールを飲み干した。

結局それが言いたかったんだろ。

でも僕にとって先輩の彼女がほかの男と寝ていようが何をしていたうがそんなことはどうでもいいことだった。

そして、先輩の言った意味がわかっていている自分がいた。

それは、僕が日常からただ気付かないふりをしていたことだった。

そういうもんじゃないですか？ぼくがそういうと先輩は少し考えた後満足げに二人分の勘定を払い、多少ふらついている足取りで電車に乗って帰っていった。ぼくは結局生中一杯とカシスウーロンしか飲まなかった。

僕が家に帰るともうすでに12時を回っていた。

僕は冷蔵庫から安物の赤ワインを出してコップに注ぐとそれを一気に飲み干した。それを二回続けると頭がぼんやりしてきて顔が真っ赤になった。

明日は授業が2限からだった。

バイトはないはず。ユツケからメールが来ていたけれど、僕は僕が寝ていることにした。ベットに倒れこむと、起きたら朝の10時半だった。

2限のドイツ語の授業は10時40分から始まる。

目が覚めたのが10時30分、ここから教室まで約30分。到底開始には間に合わない。

でも単位のことを考えると欠席にするわけにもいかず、僕は歯だけ磨いて家を出た。電車の中でユツケに返信したが授業中だったのでもちろん返ってこなかった。

頭は二日酔いで、さらに毛布もかけずに眠ってしまったため寒気がした。

大学の生協でパンとコーヒーを買い、教室に入ったところで宿題をやっていたことがことに気づいた。

おまけに教科書もプリントも忘れていた。何もかがうまくいってなかった。

体のどこかにある歯車はギギギという音をたて、噛み合わせが狂い始めていた。

体調の悪い僕はとりあえず昼だけペースケと学食でとったものの、3限の哲学総論をサボることを決め、いよいよ悪寒が激しくなってきたので5限の英語も欠席を決め込み、家に帰った。

ドラッグストアで風邪薬を買い、説明書に書いてある摂取量の倍を摂って眠った。横になっても頭の中がぐるぐると回転し続けていた。

インターホンで目が覚めた。

だいぶ眠ったようにも思えたけれど、実際は3時間くらいしか眠れてなかった。頭の回転は止まっていたけれど、逆にさび付いてしまったのかのように動きが鈍くなってしまっていた。インターホンになり、その状況が人の来たということを示しているんだという認識につながらなかった。

頭の中の配線板がいろいろなところで焼け落ちてしまったみたいだった。インターホンがまた鳴り、今度はようやく立ち上がることができた。来客はユツケだった。

「こんにちは」

彼女はそう言った。言ったような気がした。僕の頭は人の言葉を認識することが危ういくらい動きが鈍かった。

ユツケを部屋に促しているときも僕は一度足をつまずきかけた。彼女は左手にサミットのビニール袋をぶら下げていた。

「寝てた？すごい顔…」

「体調が悪くて…授業はおわったの？」

「5限終わって買い物してきたの。さつき顔色悪かったし、昨日メールも返ってこなかったからきつと風でもひいてろくなもの食べてないんだろうなって」

彼女は台所でなにやら作り始めた。

「ごめんメール返さなくて、ほんとありがとう」

メールを返さなかった本当の理由は言えなかった。

僕は洗面所で顔を洗い、汗をかいていた服を着替えた。体は重く、頭はまだぼおつとしていた。

ユツケは冷凍室に入っていた米をレンジで解凍し、それでおかゆを作った。それから買ってきた野菜で煮物を作ってくれた。手際のいい動きだった。僕はユウリのそんな姿をリビングのベットにもたれたまま無言で眺めていた。

「結構できるでしょ」

彼女はおかゆをお椀に移しながら僕に言った。ぼくはうん、と言った。本当にその通りだった。

僕はユツケの作ってくれたおかゆと煮物を食べながらいろいろなことを後悔し、反省していた。いろいろなことを間違えていた。配線板が焼け落ちていたのは僕の頭の中だけじゃなかった。こころの方が重症だった。

「カゼ移っちゃうかもね」

僕は言った。

「んー、そうだねー。それは困るなあ」

ユツケは意地悪な笑い方をしながら僕に言った。彼女は僕がおかゆと煮物を全部食べ終えたのを見送ると、そのお椀と皿をほかの洗い残しの皿と一緒に洗剤を使って丁寧洗い、タオルで拭き終わると、またね、と言いつつ残して帰っていった。

僕は弱々しくありがと、またね、と言ってユツケを見送った。弱々しかったのはカゼのせいだけじゃなかった。

カゼは翌日に治った。

次の週から大学祭が始まり、一週間授業は休講になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9038d/>

大学デビュー物語

2010年11月2日14時09分発行